
普通の現代人が幻想入り

さっきゅん@瀟洒なメイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通の現代人が幻想入り

【Nコード】

N8802X

【作者名】

さつきゅん@瀟洒なメイド

【あらすじ】

普通の現代人、霧雨悶助は霧雨魔理沙と言う妹を無くし（幻想入りのせい）、両親も離婚し、母にも捨てられた。施設に預けられ、平凡に生活していた彼の日常は、やがて妹と同じ世界へ行きそして生活を送ることとなる…

1話「記憶」(前書き)

オリキャラが含まれてます。これからの展開でハーレムとかもある
かもしれない。

主人公強設定。人間を軽く超えたレベルですね。人間だけれども人
間卒業。

上記の設定が嫌いな方は、閲覧をご遠慮下さい。

1話「記憶」

今、あいつはどこに居るんだろうな。

2004年12月17日。特別な日でも無く、夜の岡谷市を歩いていた。

俺の名前は、霧雨悶助。名前？ああ、作者のネーミングセンスが無いから仕方ない。

あの東方projectの黒白魔法使い、霧雨魔理沙の兄だ。そりゃ、現代でこのことを話しても二次元だろ、で済まされる話なので話してない。

魔理沙は幻想入りで幻想郷に行ってしまったのだ。あつちで何故このように主人公キャラになってるかは知らないが。

霧雨家は、俺が7歳の頃に両親が離婚した。母に引き取られたけど、結局母の意思で施設で預けられることになったってことだ。

まあ、施設にPCがあったのは驚きだったけど。しばらく岡谷市内を歩き、施設へと戻る。俺は、新作の東方神霊廟をプレイしようと試みた。

そして一時間後…

悶助「よし、6面… Normalだからいいよな、えっ、easyモードお！？（笑）とか言われないもんね！」

魔理沙「男ならhardだぜ」

…ん？魔理沙の声がしたような気がする。気のせいかな…

悶助「あーっ、最後の一機が……まあいいや、またやり直そう」

そして、魔理沙の声がしてから不思議な現象が起きる。

… 神霊廟の自機選択が魔理沙しか選べなくなったのだ。

悶助「ちょw 霊夢さん選べないw」

仕方なく魔理沙を使う。しかし、不思議な現象はこれだけに止まらなかった。

… 今度は、Lunaticしか選べなくなっていた。

悶助「… 神主さん、助けてお（、・、・、）」

どンドン笑えなくなってきた。プレイする気も失せて、時間を見ると…

悶助「お、もう深夜2時か… 寝ないとおおうやばいやばい。」

PCの電源を落とし、布団に被る。

ただ、神霊廟をプレイしてた時の不思議な現象は、何か起こる予兆なのでは… と不安を感じながらも、こういう時は昔の頃を思いだそうと考える。

悶助「… でも、魔理沙どうしてるかなあ。幻想郷でやっていけてるみたいだけど、やっぱり心配だな」

魔理沙を心配しながらも、まああいつなら大丈夫だろうと楽観しているが…。

そう考えた後には、すぐに眠りに着いた…

所は幻想郷。博麗神社では何やら話がされていた。

紫「へえ、霧雨悶助：ね 魔理沙の兄でただの人間、か。 まあ
いいわ。面白そうだし、魔理沙も再会ってことで：（チラッ）」

幻想郷の大賢者、八雲紫は彼を幻想入りさせる気満々だ。

まあ、妖怪に喰われたとしても責任は取らないが。

霊夢「：私は別に構わないわよ。でも、魔理沙と血縁関係だからな
あ：： お茶たかりに来る人数が二人に増えそうね。」

博麗の巫女、博麗霊夢は血縁関係と言うことに不安を感じているよ
うだ。

そもそも、何故幻想入りすることになったかと言うと、紫の盗
み聞きから始まったことだった。

神社での霊夢と魔理沙の会話で、「お兄さんとか居るの？」と聞く
霊夢に、魔理沙が居るぜ、と言った後自分の兄について熱心に語り
出したのだ。
たまたま見えない所で聞いていた紫が興味を持って：：となって、今
に至る。

紫「それじゃ、行って来るわ」

紫は、早速行動に移した。

1話「記憶」(後書き)

初投稿です

2話「異世界」

早朝4時。

その日は、生憎の雨でとても外に出られる状況ではなかった。

悶助「ん…？ アラームなんて設定してなかった筈だが」

紫「おはよう」

悶助「うん？おはよう…って え！？」

悶助が驚くのも無理なかった。

何故なら幻想郷の大賢者・八雲紫が目の前に居るからだ。

紫「霧雨悶助くんだったかしら？」

紫は、妖艶な色気で此方に近づいて来る。

悶助「あ、はい。でも、何で八雲紫さんが居るんですか？」

名前を聞いた瞬間、ピクッと反応する紫。

紫「あなた、私の名前を知ってるのね？」

悶助「この世界では幻想郷は二次元ですから、情報が入手出来るんですよ」

紫「…まあいいわ。それで、本題のただけれど 幻想郷を連れて行きましょう」

悶助「ふえ？幻想郷へ行く？そんなこと」

紫「ようこそ、幻想郷へ」

紫は悶助を問答無用で連れて行くのであった。

悶助は、深い森の中に落とされた。

悶助「あいたた… ここはどこだ？というか紫さん？…」

紫の姿は無く、あるのは森だけだ。

悶助「まさか… 魔法の森！？ そしたら、神社目指さないとまずいな…」

まずいと言うのは、妖怪がいつ襲って来るか分からないからである。妖怪に遭ったら命は無い。

悶助「服とかは変わってないみたいだな。良かった良かった」

歩いてても歩いてても、ゴールが見えない。俺はどこへ向かっているのだろうか？妖怪の恐怖に少々怯えながらも、彼は歩いた。

悶助「あの鳥居と石段… 博麗神社か？」

悶助は左上の方向に博麗神社があるのを確認すると、全力で走り出した。

悶助「これは襲われる前に行くしかない！ デストロオオオオオオオ
イ！…」

霊夢「今日も快晴ね… あの紫の言ってた奴、もう幻想入りしたか

しら？」

霊夢はお茶を啜りながら、淡々と言う。

霊夢「…まあいいわ。暇だし寝よつと」

10分後。

博麗神社の前に着いた。やっと、ここまで来た…

悶助「石段が意外とあるな… ざつと120段はある」
石段を登る気力もほぼ残つて無いが、力を振り絞つた。

神社の鳥居に着き、辺りを見回すと人の姿は無かつた。
出掛けるのかな、と思いながらもここで生きていけるように、お祈りすることにした。

チャリーン

悶助「ここで生きていきますように…」

お賽銭を入れ、お祈りをし、神社を後にしようとした瞬間だった。

霊夢「お賽銭してくれたの…？」

そこには、紅い服を着ていて、腋が露出しているのが特徴の巫女さん 博麗霊夢が居た。

悶助「うん。つて…霊夢さんじゃないか。涙目になつてるけど、大丈夫か？」

霊夢「泣いてないわよ！」
と、悶助の頭を叩く霊夢。

悶助「痛いなあ（…）ほんとに、どうしたんだ？」

霊夢「その… お賽銭、ありがとう」

悶助「え、神社はお賽銭入れるところじゃないのか？」

と、普通に返される霊夢。

霊夢「そ、そうよね！？ やっぱりそうよね！？ そうだよね！？」

寧ろそれが普通なのだが、幻想郷では常識に囚われてはいけない。

悶助「みんな、お賽銭してくれないんだなw」

… 霊夢の頭の線が一本切れた。

霊夢「神霊…」

夢想封印！！

悶助「ちょw 霊夢さんやめろっわああああ」

まだ住む所も決まって無い悶助。これからどうするかを考え始めたのであった。

2話「異世界」(後書き)

幻想入りしました！これから彼は挨拶に回ると思います

3話「紅き館を目指して」

…うつうつ、身体中が痛い。

夢想封印をまともに喰らったのかと聞かれば、否ではないが。

そもそも、何であんなに自然に霊夢さんと喋れたのか分からない。

無意識…って訳でもなさそうだし。

霊夢「起きたわね」

そこへ霊夢さんがやって来た。加害者とは言え、手当てはしてくれ
たようだ。

悶助「んと、自己紹介してなかったよな？ 俺の名前は…」

霊夢「霧雨悶助、でしょ？ ちょっと可笑しな名前ね。」

何で霊夢さんが知ってるのだろう、とは思った。

でも博麗の巫女なのだから幻想入りしてくる人物の情報を入手して
るんじゃないかと思うと別に疑問では無かった。

悶助「まあ、親から授かった名前だからさ。仕方ないよ」

霊夢「もんすけ…だから、あだ名はもんなんてどうかしら」

あだ名なんて今まで付けて貰ったことの無い悶助は、喜んで了
承した。

その後、俺達はこれからどこに住むか、と言うのを考え始めた。

悶助「…じーっ。」

霊夢「うちはダメよ。神主が許さないわ」

悶助「神主なんて居たのかw」

霊夢「ええ。それで、いくつか候補があるんだけど」

悶助「紅魔館とかやめてくださいよ」

紅魔館は、悪魔の住む館だ。死亡フラグしか立たないだろうに。

霊夢「あら、でも他の所も紅魔館並みに危ないんだけどねえ？ それに、ここから一番近いのは紅魔館だし、道のりも安全でしょう」
悶助「なるほど、だから選んだのか。…これが最後じゃないといいけど。」

霊夢「もんなら大丈夫よ。多分」

悶助「はあ…」

霊夢「な、何よ？」

悶助「いや、何でもない。んじゃ、行ってきます」

霊夢「はい、行ってらっしゃい」

死亡フラグしか立たないが、とりあえず目指してみることにした。

霊夢「あの大きい魔力… あれは魔法使いに転職出来そうね。無職から」

霊夢「少なくとも魔理沙よりは大きいわね… 相当な力の持ち主かな」

紫「ええ。…多分、七曜の魔法使いよりも魔力は大きいわ」

霊夢「…相当ね。スペルカード持たせとけば良かったわ」

紫「まあ、悶助くんなら大丈夫よ。弾幕の出し方とか教えてる前提で大丈夫、と言ってるけど。」

「霊夢」……あ。」

悶助は、妖怪に注意しながら紅魔館を目指していた。

悶助「えっと、北へ進めとか言ってたな霊夢さん。」

三時間程歩いているが、未だに紅い建物は見えない。

悶助「まあ、北へ行けばなんとかなるよな。」
気楽な考えで、目指していた。

∴夜9時。 現在魔法の森。 夜となれば、妖怪の出現率も上昇するものだ。

悶助「∴紅魔館に着くとかその前に、寝る所が問題だった（・・・、（」

食料も道具も武器も持っていない。妖怪達から見れば、格好の餌食だ。

どうしようかと悶助が頭を悩ませていた。魔法を使うか？いや、無理だな。魔理沙じゃあるまいし。

そうやって立ち尽くしていると、突然一人の少女が現れた。

？「あら、こんな所に人間？また物好きな人間も居るものね」

4話「人形師」

「あら？こんな所に人間？物好きな人間も居るものね。」

突如、1人の少女が此方に声を掛けて来た。

金髪の髪に、難しそうな本を持っていて、人形と何やら話している。恐らく、自律人形だろう。

悶助「…アリス？」

アリス「あら、あなたとは面識が無いのだけれど…何者？」

上海「シャンハイ」

人形使いであり魔法使いでもある、アリス・マーガトロイドが目の前に、此方をやや警戒しながら立っていた。上海人形だと思われる人形は、剣を装備し戦闘準備に入っていた。

悶助「待て待て？俺は怪しいものじゃない、外来人だ。何故知ってるかと言うのは…」

アリス「…詳しいことは私の家で話しましょう？多分、寝床も無いんでしようし泊まらせてあげるわ」

上海「シャンハイ」

この人は心が読めるのか？w

こう思いながらも素直に嬉しかった。知らない人間を泊まらせてくれるのだ、感謝感激だろう。

アリスはそう言うと足早に北へと歩いていった。
上海はまだ警戒心を解かず、剣を構えていたがしばらくすると警戒
を解いたのか、剣をしまった。

アリスの家は湖の近くにあり、俺を見つけた場所からはそう遠く無
かった。…待てよ？湖？まさか…

アリス「ここが私の家よ。どうぞ入って」

悶助「お邪魔します」

アリスの家の中は、とても整理されていた。足踏み式のミシンがあ
り、裁縫が趣味なのか？と思いつながら部屋へ案内される。

アリス「ここがあなたの部屋。自由に使って構わないわ」

悶助「ありがとうございます」；；；（ブワッ）

アリス「話は下で話しましょう」

悶助「はい（；；；）」

感謝の気持ちでいっぱいになり、若干涙目になりながらも下へ案内
される。そして、椅子に座った所で話が始まった。

アリス「さて… あなた名前は？」

悶助「霧雨悶助です」

アリス「霧雨…？まさか、魔理沙と関係があるのかしら？」

悶助「はい、兄妹の関係です」

アリス「なん…だと!？」

悶助「??？」

アリス「…こほん。そういえば、私の名前を言って無かったわね。改めてアリス・マーガトロイドよ。」

悶助「アリスさんですね。改めて霧雨悶助です」

アリス「アリスでいいわよ。あなたは、どう呼べばいいかしら？」

悶助「もん、と呼んで欲しいです」

アリス「そう。んじゃもん。あなたはどこに行く予定だったのかしら？」

悶助「紅魔館です。霊夢さんに紹介されて、目指してるんですが…」
アリス「ああ、ならすぐそこよ。だけど、今は夜だから近づかない方がいいわね。あの姉妹も活動も活発になる頃だし」

…え？すぐそこ？

やっぱり、あの湖は霧の湖だったのだ。嫌な予感が的中し、うなだれる悶助。

悶助「…分かりました。ありがとうございます」

アリス「今日は行っちゃダメよ。明日の昼とかにしなさい」

悶助「はい」

そうこう話してるうちに、夜0時を過ぎていた。最後に少し現代の世界の話をし、おやすみなさいと伝えた。

…部屋へと戻り、早速ベッドにハリウッドダイブする悶助。
とてもふかふかで、柔らかかった。

悶助「ふかふかだww うはww 気持ち良いw」
これなら気持ち良い朝を迎えられそうだ…^^

悶助「んじゃ… おやすみなさい。 zzzzzz…」

深夜2時。アリスは、悶助のことについて考えていた。

アリス「弾幕は教えてあげましょうか。…あんな悪魔の館に行くのだから、少し鍛えておかないとね。 試しに？と戦わせましょう」

アリスは、一応教えてあげることにしたのだった。

5話「弾幕と氷精」

朝7時。目覚まし時計は無かったが、気持ち良く眠れたので目覚めはとても良かった。

ふと、悶助は思った。

悶助「ここに住みたいお(、・・・)」

住ませて貰えば、紅魔館に行くことにはならず死亡フラグが回収されるのだ。

：しかし、口には出せなかった。流石に図々しすぎるにも程があるだろう。

アリス「あら、おはよう。目覚めはどうかしら」

悶助「最高です。GJ!」

アリス「そう。良かったわ。：朝ごはん出来てるから、下に来なさいね」

アリスはそう言うと、下へ降りていった。シート、整えないとな。

下へ降りて朝ごはんのメニューを覗いてみると、パンに紅茶、目玉焼きと言う俺に取って最高のメニューが出てきた。これが、理想の朝だ…

悶助「アリスさん、ありがとうございます」

アリス「何よ、いきなり。」

悶助「こんなに気持ちのいい朝は初めてです」

アリス「…そう。良かったわね」

悶助「はい！！（、・・・）ありがとうございます」

面となつて、こんなに感謝の気持ちを伝えられるのは初めてだ。アリスはやや赤面しながら、朝食を取り終えた。

午前10時。一旦落ち着いたので、アリスは話を持ち出した。

アリス「もん、唐突だけど弾幕は撃てる？」

悶助「…撃てる訳無いでしょう。ただの人間なんですから」

悶助の言う通りだ。何も力を持っていない人間に、弾幕を撃てる筈が無いのだから。

アリス「あなたに、力があるか試すのよ。弾幕を教えてあげるわ」

悶助「……………」

悶助は、自分に力なんて無いだろう…と言う気持ちよりも、力の有無を確かめたい気持ちの方が強かった。力があれば、紅魔館での戦闘はなんとかやっていけるような気がする。そう思ったのだ。

悶助「はい。お願いします」

アリス「んじゃ、まず私が手本を見せるわね。撃ちたい弾を想像して、撃つのが基本ね。」

アリスは、そう言っていると水色の弾幕を放った。水色の弾幕は、木に当たり木を折った。あんなのまともには喰らったら、一溜まりも無いな。

アリス「それじゃ、やってみましょうか。丸い弾を想像したら、手を前にかざしてみなさい」

悶助「分かりました」

悶助は、赤色の丸い弾を想像して、手を前にかざした。すると、赤い大きな弾が出現し、悶助の頭上を浮遊し始めた。

アリスは、その弾の大きさに圧倒された。

アリス「！？」 最初からこんな大きな弾を出すなんて… ま

あいいわ。もん、腕を振りかぶってみなさい」

悶助「こうですか？」

悶助が腕を振りかぶると、大きな弾が真っ直ぐ飛び、木々をなぎ倒し湖に落下した。

悶助は自分でも少々驚いていた。俺、人間だよな？

アリスは、悶助は紅魔館でやっていけることを確信した。後は、スペルカードがあれば尚更良いだろう。スペルカードが無くてもやれそうな気がするが。

こだ？

すると、突如湖から小さい女の子が出て来た。青のリボンに水色の髪。普段湖で過ごしてるからだろうか、裸足だ。

？「あんた、誰？ 人間？」

それはまさしく？…では無くチルノであった。なるほど、？なら大丈夫だとアリスは思ったのか。

悶助「なんだ、？か…」

チルノ「？じゃないわよ！？なのはそつちでしょ！」

…そういう所が？なんだよ？と、溜め息を付く。

チルノ「？と言った仕返しに、弾幕で返してやるわ！」

氷符…

アイシクルフォール！！(easy)

無数の氷柱の弾幕が此方に襲って来る。悶助は落ち着け、と自分に言い聞かせながら、赤色の丸い弾を3つ程想像し、手をかざし、腕を振りかぶった。

赤い大きな3つの弾幕はチルノに向かって飛んで行き、チルノに全弾命中させた。

ピチューンノ

チルノ「くっつ…覚えてなさい！」

自分も氷柱の弾幕を喰らい、両腕を負傷した。肉までは貫いていないようだが、出血が酷い。

俺は、ポケットに入っていたティッシュで患部を巻き、湖の氷を潰しアイシングをした。これでしばらくは大丈夫だろう。

手当てを終えた俺はチルノが居るか確認したが、チルノは居なかった。

ピチュったのか？しばらくしても襲って来ない。

悶助「倒したのかな？逃げたのかもしれないが…ま、いつか？」

悶助は、先を急いだ。後少しで、紅魔館だ。

6話「剣と血」(前書き)

今回某セガのハイスピードロボットバトルの武器が登場します。

あくまでレプリカです。人が扱えるように加工した、って感じかな？

6話「剣と血」

悶助「で、でかいな…」

悶助は、遂に紅魔館に着いた。想像してたのとは違い、その大きさに圧倒された。

さつきチルノと戦闘した時の傷はまだ痛むが、痛みは無くなって来て…ない。チルノもなかなかやるな。ヒリヒリする…これから戦闘とかあるのに、大丈夫か俺。

門の前に来たのは良いのだが、門は開いていて、中華風の服、橙色の髪に、龍と書かれた帽子を被っている人が居眠りしていた。…紅魔館って、こんなに警備薄かったけ？（…）

居眠りしている女性の名前が思い出せない。

本みりんだっけ？くれないみすずさんだっけ？と何とか思い出そうとしたが…諦めた。ごめんなさい、本みりんさん。

安易に紅魔館へは入れたが、見つかったら一間の終わりだ。あの吸血鬼の生け贄にでもなるんだろうかと思つと、背筋が凍る。

しばらく、館の外で音を殺し潜んでいたが…

「 侵入者らしき人物を発見。直ちに戦闘チームは拘束に向かえよ。」

多分妖精メイド隊だろうか、そいつらに見つかったようだ。

悶助「うわ、マジかよ…」

拙いと思うが、武器も持っていない。何か辺りに武器になるものは と思っただが、あるのは草むらだけだ。

悶助「…れ、霊夢さん！紫さん！誰でもいいから（ry）」
俺には、助けを求める他無かった。

もちろん、ダメもとで助けを求めているつもりだった…

すると、助けを呼んだ瞬間、紫さんが現れた。
まるで待ってました、のようにひょいと現れたが、今はそんなこと考えてる場合では無い。助けを求めた。

悶助「紫さん、助けて下さい。どうやら妖精メイドに見つかったよ
うで…」

紫「直接助けてはあげないけど、間接的に助かる方法ならあるわよ。」

「

…その時はやや混乱していて、紫さんが何を言ってるのか理解出来なかったが、とりあえず方法とやらを教えて頂こう。

悶助「その方法は、何ですか？」

紫「武器を取って戦う。これしか無いわ。…あなたに、この武器をあげる。」

手渡されたのは、人間にでも持てる1200g程度の重さの剣。リーチはやや短い、金属の剣で威力は高そうだ。

紫「その武器はデュエルソード。近接用の武器よ。ただ、レプリカだから安物の剣なんだけど…」

悶助は衝撃を受けた。

おいおい、某セガのハイスピードロボットバトルの剣じゃねえか
wwww

初期装備にしては、強かったよな。デ剣コンボ強いよデ剣コンボ。

悶助「いえ…ありがとうございます！！助かりました」

紫「…まあ、あなたなら出来るわ。保障は出来ないけど」

悶助は無言で紅魔館の中へ去って行った。彼の力は、未知数だ。もしかしたら、かなり強い力を秘めてるかもしれない。

紫「…でもあの子、あのレプリカの剣貰えてかなり嬉しそうだったわね。外の世界から持ってきた甲斐があったわー」

紫が満足そうに隙間を閉じた一方、悶助は紫から貰ったデュエルソードで妖精メイド達と戦っていた。

悶助「いやあ、デ剣貰えるとは思わなかったよ。レプリカでも金属は金属だから十分かな？」

悶助のテンションが上がる最中、そこに戦闘チームかと思われる妖精メイドがやってきた。

悶助「よし、かかってこい！…！」

悶助は決闘だと思い妖精メイドが剣を抜く時を待つ。

妖精メイド「メインターゲットを発見。排除します」

妖精メイド達は弾幕を撃ってきた。あれ？決闘じゃないのか？…

悶助「やばい、弾幕の存在を忘れていた…！」

悶助は、すっかり忘れていた。そうだ、アリスさんの。しかし、弾幕はもう近くに来ていて、此方から弾幕は打てない。

悶助「ええい、デ剣を振り回せー！」

悶助がデュエルソードを振った瞬間、弾幕が反射された。

そして弾幕は妖精メイドの方に飛び散り、妖精メイドは逃げるように奥へと走って行った。

悶助「うっ… また弾幕を喰らった…」

妖精メイドは上手く撒けたようだが、今度は右脚を負傷。

血がぼたぼたと滴り落ち、傷も皮膚が剥がれ生々しく残っている。

ティッシュもチルノと戦った分で使い切ってしまったので、手当ては出来なかった。

悶助は、痛みを堪えながらも何故これくらいに怪我で済んだのか？
と思っていた。あんなに大量の弾幕を、このデュエルソードが守ってくれたのか…？

悶助は、少し笑みを浮かべた。

悶助「…痛みは残るが、デ剣が守ってくれてると思つと俺も黙つてられないな」

俺は、地面からデュエルソードを抜いた。デ剣は、俺を守ってくれたんだ。今はそう信じよう……

悶助「さて、行きますか」

… 1人の人間が、悪魔の館の中へと消えて行つた。

？「お嬢様、多分人間だと思われる者が侵入した模様です」

？「ふふふ、そうね。まずは手当てをしなさい。その後は…力の有無を確かめるわ。」

？「妹様の所へは？」

？「勿論行かせるわよ。けど何か、感じるのよね…あの人間から。」

7話「大図書館」(前書き)

話は展開速すぎたらいけないと思っているので、結構ゆっくり進ませてもらっています

速いか遅いか分からないけど……(・・・)(

7話「大図書館」

悶助「大分痛みが引いてきたな。右脚はまだ痛いが…ぐっ。」

痛みがやっと引いたのは、チルノと戦った時に受けた両腕の傷だ。俺は、両腕に巻いてたティッシュを外し、右脚に巻いた。両腕の傷は、かさぶたが出来ていたので問題ないと判断した。

悶助「…ただ、俺侵入者扱いされてるからなあ。メイド長やあの吸血鬼に見つかつたら…DEAD ENDだな」

だが、メイド長や幼じ【規制】あの姉妹と一度は会いたい。と言うか、会わなきゃ来た意味ないな…？

…戦闘やレプリカの剣のことで頭がいっぱいだった俺は、本来の目的を失いかけていたようだ。

俺がここに来た理由は、ここに住ませてもらうこと。ただそれだけだ！

？「…入ってもいいわ。」
？「失礼致します。現在、あの人間が大図書館へ向かっている模様です。」
？「ふーん、パチエの所に行くのね。…いいわ、今は好きにさせときなさい」
？「承知致しました。」
？「……」

…ん？何か分からないが、俺は外に出てしまったようだ。
悶助「迷子になりそうだな…どこ向かってんだ？俺」

紅魔館の門の付近は晴れていたんだけどな…
濃霧に包まれ、先が見えない。…俺、白玉楼まで来た覚えは無いぞ。
そうこう思ってるうちに、しばらく歩いてたいたようで、大きい建物が俺の目の前に現れた。

悶助「お、また何やら建物を発見したが…ヴァル大図書館か！？」
本物を目の前にして、改めて驚く。
でも、図書館って別館にあったのなwと思いながら、吸い込まれるように図書館に入った。

？「…侵入者？それも人間の匂いがするわね」

悶助に気付いたこの図書館の管理人？と言っべきだろう少女が、警戒を始めた。

？「パチュリー様くどうしました？」

赤の髪に、黒の服を身に付けた悪魔？が言う。

パチュリー「人間が侵入したっばいから注意しなさい」

？「見つけたらどうしますか？」

パチュリー「そうねえ…こっちへよこしなさい」

？「分かりました」

月の帽子を被り、紫の服を身に付けている少女の名は、パチュリー
と言うようだ。

すっかり紫もやしで定着していたので、本名を忘れていた。危ない
危ない…

俺は、まだあの赤髪の悪魔？には見つかっていなかった。
暇だったので、本を見てみることにしたのだが…

悶助「幻想郷縁起つて… A Q Nの書いたものだよな、すげえ W W

お、ここにも不思議の国のアリスとかあるん」

？「見つけましたー パチュリー様」

パチュリー「そう。んじゃこつちによこして」

うっ、バレた。

俺はどうすることも出来ず、図書館の真ん中辺りまで連れて行かれた。

アクロバティック飛行で連れて行かれたので、ちよつと頭が痛い…

パチュリー「ふーん、あなたが… 例の人間ね？」

悶助「えっ」

パチュリー「話は聞いているわ。レミイからね」

悶助「えっと、侵入者は侵入者なんですが訳がありました」

パチュリー「あなたの名前は？」

俺の言い訳を無視し、話を進める。…聞かれたことだけ答えようか。
うん

悶助「霧雨悶助です」

パチュリー「霧雨…悶助？」

悶助「はい」

パチュリー「…まさか、魔理沙のお兄さんかしら」

悶助「？ そうですが」

パチュリー「……………」

パチュリーは驚いた様子のまま、黙っている。

…そんなに魔理沙の兄であることって、重要なのかなあ？

パチュリー「…こほん。その剣は何？」

悶助「デ剣…じゃなくて。デュエルソードと言う金属の剣です」

パチュリー「ふーん… 面白い武器ね。でもかなり脆そうだね」
悶助「レプリカだから尚更脆いと思います（、、、、）」

結構話した所で、俺の侵入云々についての話に変わった。

パチュリー「あなた、どうやって入ったの？」

悶助「門がたまたま開いてまして、門番の方も居眠りしていました」
パチュリー「そう。でも、何故入ろうと思ったのかしら？」

悶助「ここに住みたいからです。霊夢さんに紹介されて、交渉をしようかと…」

パチュリーは、溜め息をついてまた話し始めた。

パチュリー「霊夢はあなたに死ねと言ってるようなものだね」

悶助「ですよねー（、、、）」

パチュリー「ま、ここに住むなら咲夜かレミィに直接交渉するしかないわ。」

悶助「…もし、ここに住むことになったら、魔法とか色々教えて下さいね。」

パチュリー「ええ。約束するわ」

俺は図書館を出た。

さっきまでの濃霧は消えており快晴になっていて、何となくだがすがすがしい気持ちになった。

さて、約束したからには生きて帰るか。

悶助は再び本館を目指した。

7話「大図書館」(後書き)

文章力無さ過ぎワロタ。

自分でも痛感してます(´、`)

8話「メイドとナイフ」(前書き)

ナイフは新型高振動ブレードかな(^ ^)と思いましたが普通の銀製ナイフにしました。

咲夜さんがそんな危ない武器持つても仕方ないか(r (ピチューン

8話「メイドとナイフ」

…ふう。

俺は今紅魔館の本館に居る。いつ捕まるか分からない状況だし、剣は構えているのだが…

悶助「誰も居ないのか？まさか、留守とかじゃ…無いよね。」
1階は誰も居なさそうなので、2階に行った。

紅魔館、2階。

悶助「お、妖精メイドがちらほら居るな。」
2階へ俺をおびき寄せる作戦か？と思って、デュエルソードを構える。

妖精メイド「居たよ！こいつだ！」

…やはり、おびき寄せる作戦らしい。

悶助「咲夜さんが、こんな見通せる作戦を出す訳無いよなあ…」

妖精メイド達が立てた作戦なのだろう、と思いデュエルソードを構える。

妖精メイド「再びメインターゲット発見。排除します」

妖精メイドは、弾幕を撃たなかった。決闘か？

すると、妖精メイドは鉄の剣を抜いた。やはり、決闘かと思ったの

だが…

悶助「…あれ？三人vs一人って決闘じゃなくね？」

妖精メイドは三人居て、三人同時に剣を引き抜いたのだ。

妖精メイドの鉄の剣は、細い刀身だった。デュエルソードの刀身の太さを10とすると、妖精メイドの持つ剣は2くらいか？

妖精メイド「三人なら勝てる！ここで成敗だ、人間！」

…何故だろう、成敗と言う言葉はどうしても成敗にしか聞こえない。どこのジ　スだよ。

悶助「その細い剣、今にも折れそうだな…」

妖精メイドは斬りかかって来たが、頭の構造が単純なのか？

挟み撃ちなど全くせず、正面で俺を狙って来た。おお、こわいこわい。

とりあえず正面は危ないと思ったので、マット運動の基本である前転をした。

前に動けば、剣はまず当たらないだろう。マット運動、こういう時に便利だよな、うん

悶助「とりゃあ！」

妖精メイド「!？」

剣は当たらなかったが、背中が痛い…

前転痛いお(´・`・`・`・`)

妖精メイドは俺が前転したせいで足を引っ掛け、顔から倒れたようだ。

悶助「あいたた… あれ？俺のデ剣が見当たらないんだが」

デュエルソードがどこを見渡しても見当たらない。どこ行っただ

…？

まあ、複製レプリカの剣だったし、脆そうだったので決闘用には使えなかつたかもしれない。…

とりあえず無防備ではいけないので、倒れている妖精メイドの鉄の剣を2つ奪った。

悶助「これでダブルセイバーだ…いや、モハの双剣か。…よく見るとオーダレイピアと似てるな」

ダブルセイバーだから、大技のクロスハリケーンとか…いや、無理だな。まず大怪我する。

あ、モハの鬼人化なら出来るな。ただあくまで動作だけで、攻撃力が上がる訳でも無いし需要は全くないが。

…っと。遊びはここまでにしておう。

まだ妖精メイドが居るかもしれないからな。

その頃、紅魔館4階。

咲夜「失礼します。お嬢様、あの人間は現在2階に居るようです」
?「…そろそろね。咲夜、行きなさい」

咲夜「承知致しました。」

紅魔館2階。妖精メイドが居ないか警戒していたが、どうやらあの三人しか妖精メイドは居なかったらしい。良かった…

2階に居ても仕方ないので、俺は3階へ向かった。

3階となると相当な警備がされているだろうと想定し、慎重に階段を上がる。

そして3階に着いた。

警備はどうなってるかと覗くと…

咲夜「彼は3階に居るはずよ、全力で探しなさい」

妖精メイド「了解しました!」

そこには、咲夜さんに20人は居る妖精メイド。

悶助「…おお、こわいこわいなんて言ってる暇じゃないな」

でも、今更どうやって逃げる?…

窓を見ると、門の前は妖精メイドによって封鎖されており、逃げ道

は無い。

悶助「デ剣も誰が盗んだのか分からないしな…」
目的は住ませてもらうことなのだ。無駄な抵抗はしない方が無難だろつ。

俺は観念し、3階の踊場へ向かう。
しかし、そこには誰も居なかった。あれ？妖精メイドと咲夜さんはどこ

咲夜「お、観念したようね？」

咲夜さんは急に現れ、ナイフを突き付ける。

悶助「抵抗はしませんよ」

咲夜「ふーん、人間なら抵抗すると思ってたけど…心外だわ」

悶助「それよりも俺のデュエルソード、知りませんか？」

咲夜「ああ、あの剣？あれなら2階に落ちてたから回収したわよ」

…え？落ちてた？

でも、確かデュエルソードはあつたはず…

悶助「…隙を突きましたね？」

咲夜「へえ、バレるなんて思って無かつたわ」

悶助「いつの間にかあの剣が無くなってましたからね。バレるですよつ」

咲夜「…え？何故私だと分かつたのかしら…まさか、私の能力を見抜いてた？…いや、考え過ぎね。相手はただの人間。見抜ける

はずが無いわ」

悶助「（…敢えて能力は言わないでおくか。）」

悶助は隙を突き、後ろへ下がる。

悶助「何か考え事でもしてたんですか？」

咲夜「…ちよつとね。あなたをどうやって殺すか、よ。」

悶助「俺を殺しても何もならないですよ。」

咲夜「人間でここまで来れたのは…あなただけよ。」

悶助「それは光栄です」

咲夜「剣は返すわ。この剣、お気に入りなんでしょう?。」

咲夜さんが剣を投げたので、俺は黙って受け取った。これから何を
するか、分かってる。

悶助「…二刀流だが大丈夫か?。」

と最後にルシ ルのように話し掛けた。

咲夜「ここが、あなたの墓場よ。」

あちやー、流石にエ

ダイネタは通らないか。

8話「メイドとナイフ」(後書き)

エ ダイネタ入りましたー！

流石咲夜さん。デ剣を盗ったのはあなたでしたね。このD I O様g
(ピチユーン)

【番外編】東方GTA オープニング（前書き）

グラセフの知識は浅はかなのですが、ミッションや人物などを交えながら話を作っていきたいです

番外編なので、オリキャラは途中参戦です

【番外編】東方GTA オープニング

霊夢「はあ？変な境界が出来てる？」

紫「ええ。境界を無かったことにしようと思っただけですけど、どうやら効かなかったようなのですわ」

妙な境界が出来たと言われても…な感じで見つめる霊夢。

霊夢「…別に、幻想郷に影響が無ければ境界はそのままでもいいと思うけど」

紫「それが影響するのよ。もし大量にロケットランチャー等の武器が来たとしたら、迷惑だしそれは博麗神社に落ちる予定なの」

霊夢「…行くわよ。早くそこに行かせて」

霊夢は神社に落とされたらたまらないと、早く行かせるように迫る。

紫「まあまあ、何があるか私も分からない世界に一人で行くなんて危険過ぎるでしょう？複数人で行くべきですわ」

霊夢「…それもそうね。とにかく、集めて来て頂戴」

そして、霊夢を含めた8人の住民が、集まった。

9話「決闘、そして吸血鬼」

悶助「決闘ですね」

咲夜「ええ。弾幕も交えながらのね」

相手は俺が能力を知ってることを知らない。
そして、俺は試しに聞いてみた。

悶助「…まさか、能力使いませんかよね？」

咲夜「あら、使うつもりだけど。容赦はしないわよ」
この人は鬼か。とも思ったが、良く考えると俺…

侵入者だった(´・`・´)

咲夜「さて…始めましょうか!!」

咲夜は早速能力を使った。彼女の能力は、「時を操る程度の能力」。
THE WORLD、時よ止まれッ!とはまた類が違いますよ、お客
さん。

…まあ、やってることは同じだと思っけど。

咲夜「ごめんなさいね。だけど、ここまで来たあなたが悪いのよ。悪く思わないでね」

咲夜は大量のナイフを悶助に投げ、微調整をし時を戻した。

悶助「(来た！これくらいお見通しです^p^)」

俺はデュエルソードを振り回し、ナイフを全て反射させた。

ふう、後1秒遅れてたら本当に死ぬ所だった(´・`・´)

咲夜「っ、反射させた!?!」

流石に反射することはパーフェクトメイドでも予想出来なかったか。

咲夜「…だけど、そのデュエルソードさえ壊せばいい話ね。簡単だわ」

悶助「あ(´・`・´)」

しまった、壊すと言う手があったか。

あ、まだあの双剣があるじゃないか。でも…

咲夜「考えてる暇なんて、あるのかしら？」

咲夜は再び時間を止め、デュエルソードをまずナイフで破壊した。

咲夜「…脆いわね。铸铁で出来てるのかしら」

複製のデュエルソードは、基本铸铁で出来ている。

安価で提供するのだから、安価な素材で作ると言うことだろう。

ちなみに、本物は隕鉄塊や鉛板などを使用する。

咲夜「今度こそ、最後かしらね。」

咲夜はナイフを再び配置し、微調整する。
そして、また時を戻した。

悶助「うぐっ!?!?...っつ。」

悶助は、見切ってはいて避けたのだが、ナイフが多くて避けられなかった。

ナイフは両腕、両足に刺さっていて、痛みに耐えれず動けない。

…避けた方向にもあったんだよね。ナイフ

咲夜「では、さようなら」

咲夜は、俺の頭目掛けて回し蹴りをした。

俺の意識は、そこでシャットアウトされた…

その一方、意識を失った悶助をどうしようかと考えている咲夜。

咲夜「…私が判断することじゃないわね。お嬢様に判断して頂かないと」

…すると、咲夜の方へ歩いてくる小さい女の子。

ピンク色の帽子に服を身に付け、吸血鬼だから小さい黒い翼が生えている。

？「咲夜？私は殺せと命令したかしら？」

咲夜「…身勝手な行為と判断、申し訳ございません。」

？「はあ。人間って身勝手な行動するものね。…その人間の名前は？」

咲夜「いえ、分かりません。名前を聞く気は無かったので」

？「…呆れたわ。とりあえず、命令を下すわ。咲夜、この人間を部屋へ連れて行きなさい。まだ息もあるようだから」

咲夜「…承知致しました。」

…ん？見慣れない天井だな、それに俺ベッドの上に居るのか？

悶助は、何故生きてるかも疑問だったがとりあえず身体を起ここそうとした。

悶助「いででで！！うー、まだ痛むなあ。チルノの時の痛みとは比較にならない…（、・・・）」

両足と両腕には包帯が巻かれていて、手当てがされている。

…この館で手当て出来る人物と言ったら咲夜さんしか

？「あら、起きたかしら。人間」

そこには、10歳くらいの幼女が、面白そうに俺を見つめていた。

悶助「あ、あなたは…」

レミリア「私の名前はレミリア・スカーレット。この館の主よ。」

おお、生れみりやだ！生幼女、生れみりやだ！

悶助「え、えつと俺は霧雨悶助です。」

レミリア「霧雨…悶助（笑）あつはははは！！」

レミリアは大爆笑し始めた。…作者と親を憎むぞ。俺は

悶助「…素直に傷つくんで、やめてください（´・`・`）」

レミリア「ふー、悶助なんて笑える。久しぶりに笑ったわ、ありがとう」

悶助「…そりやどうも。悶助なんて呼びにくいと思いますからもんと呼んでください」

…実を言つと、別に名前は、自分でも変だと思つのであまり傷つかない。

俺、怒れない体質だからなあ。

こんな体質じゃなかったら、今頃かんかんになって怒ってたかも。

レミリア「もん…か。いいわね、それにあなた気にいったわ。ここに住みなさいな」

…え？今なんて言った？

悶助「ごめんなさい、もう一度言ってくれませんか」

レミリア「住ませてあげると言ってるのよ、拒否権は無いわ」

…おお。おおおお！？

うはwww こんな上手いくとは思わなかったwww
心の中で自分にガッツポーズしながら、少し涙目で言う。

悶助「お、俺なんかが住んでもいいんですか!？」

レミリア「ええ。よろしくね、もん…だっけ。」

悶助「は、はい。よろしくお願いします(´；；；´)」

こうして、悶助は紅魔館で住むことになった。

9話「決闘、そして吸血鬼」(後書き)

やっと悶助が紅魔館で住むようです。

デュエルソード、咲夜さんに盗られ壊され…ごめんよ。デ剣ちゃん
…、；、；、
(

10話「能力」(前書き)

今回で悶助の能力が分かります

10話「能力」

悶助が幼じ【規制】：レミリアに住めと言われてから1日が過ぎた。

咲夜「おはようございます、もんさん」

悶助「あれ？咲夜さん、何で俺の名前を…」

咲夜「お嬢様から聞きました。あの時はすみませんでした」

悶助「いや、勝手に侵入した俺も悪いですから謝らなくていいですよ」

元は俺が悪いので、咲夜さんに謝られても困るのだ。

それに咲夜さんは本当に申し訳無さそうな顔をしているので、更に対応に困る。

れみりやにかなり怒られたのかな（・・・）

と思つてると、向こうから話を振って来てくれた。ふう…

咲夜「デュエルソード、壊してしまつたのですがどうしましょう」

あ、デュエルソード壊しちゃつたのか。

ただ複製だったので、悶助は決闘用には使えないだろうとは思つていた。

まあ、使つなら本物だよね。

悶助「デュエルソードなら、もういいですよ。」

咲夜「えっ？」

悶助「複製ですから。それに、まだ双剣があったはずなんですけど…」
咲夜「あ、あの双剣、妖精メイドの剣でしたので妖精メイドに返しました」

…咲夜さん、部下に優しいなあ。

わざわざ俺が盗った剣を返しに行くなんて…

悶助「そうですね…わざわざ返すなんて咲夜さん、優しいんですね」
すると、咲夜さんはあまり褒められたことが無いのか赤面してしま
った。

咲夜「部下ですから…当然です／＼」

咲夜「…あ、そうだそうだ。もんさん、住むことに関して話があり
ます」

悶助「もん、で構わないですよ。タメ語でokです」

咲夜「そうですね、では。…あなたには、ここで執事をしてもら
うわ」

…は？

俺が、執事？

咲夜「どうしたのよ？執事をやるのが嫌なら今すぐ」

悶助「やります！やりますから！」

咲夜「それでよろしい。あ、後血液型は何型かしら？」

悶助「え？B型ですが…」

咲夜「…一番美味しい血ね。好都合」

まさかとは思うが、血液型聞いて場合によっては吸血される、なんてことは無いよな…？

敢えて咲夜には聞かなかった。咲夜さんを信じたよ、俺。

…そのことが、現実になるのはまた後の話。

紅魔館 P M 1 3 : 3 0

昼食を取り終え、一段落付いた悶助は早速咲夜の元へ向かった。部屋を開けると、咲夜さんは執事用の服を用意してくれていた。

咲夜「はい、これ。寝る時やお風呂以外はこの服装で」

悶助「ありがとうございます」

咲夜「後は出来るわね？」

悶助「…ネクタイだけ、お願い出来ませんか？」

ネクタイの付け方など俺には分からない。高校生でも無いし仕方ない…よね。

咲夜さんはしょうがないわね、みたいな顔で素早く付けてくれた。

…出来れば、もうちょっとゆっくり付けて欲しかったが。

咲夜「はい、これでよし。」

悶助「ありがとうございます」

咲夜「さて、仕事だけど… その前に、パチュリー様があなたを呼んでるわ」

悶助「そうですか、では行って来ます」

咲夜「いつてらっしゃい」

俺は、大図書館に着いた。

侵入した時の濃霧は無かったが、若干曇り空だ。

悶助「失礼しまーす…」

図書館の中は暗い。夜はここに行きたくないな、うん

?「あ、また侵入者さんがいらっしやいましたー」

パチュリー「違うわよ。もう住むことになったのよ、この子は」

赤髪の悪魔?に言うパチュリーさん。

?「え!?! し、失礼しました。名前言ってませんよね。小悪魔と申します」

悶助「霧雨悶助です、よろしく願います」

小悪魔「此方こそよろしく願います」

あ、小悪魔さんか。あの紅魔郷の4面中ボス。素で忘れてた…すみません、小悪魔さん。

パチュリー「あなたはどう呼ばいいのかしら?」

悶助「もん、と呼んで下さい」

パチュリー「分かったわ。…こほん。もん、あなた能力を持ってるかもしれないわ。」

悶助「本当ですか!？」

おお、俺にも能力があるのか。

やっぱ、魔法を使える能力が欲しいな。ほうきで空飛びたい。

内心w k t kしながら、パチュリーの話聞く。

パチュリー「まあ能力があるとは決まってるけどね。どう?確かめる?」

悶助「お願いします(、・・・)」

パチュリーさんは能力の書、と言うのを使い確かめるらしい。対象を魔法陣の中に入れて調べるだとか。

パチュリー「……………」

パチュリーさんは何かを唱え始めた。

しばらく待っているよ…

魔法陣が現れた。この中に入ればいいのか、と思い入る。

パチュリー「そのままではらく待っててね」

悶助「はい」

20分後。能力の有無が出たらしい。

パチュリー「出たわ。あなたの能力は…」

…ごくり。固唾を飲んで待つ。

魔法と空間を操る程度の能力。

10話「能力」(後書き)

魔法と空間を操る、ですが魔法は「使える」で、空間は「操る」です。

魔法は操れないよね。うん

11話「スペルカードを作ろう」

魔法と空間を操る程度の能力。

えっと、これは喜んでいいんだよね？

魔法使えるなら早速お外に出たいです、はい。

パチュリー「チート級の能力ね。後もう一つ能力があるわ」

悶助「え？」

空想上のものを実体化させる程度の能力。

おお、試しに魔剣実体化してみるか？

悶助「S W - ティアダウナー。」

すると、本当にティアダウナーが出てきた。
どこから出てきたのか知らないが嬉しい。

悶助「マジだw すげえww」

流石にティアダウナーなので重いつたら、かなり軽かった。

…本物だよな？これ

パチュリー「この能力は危ないわね。無闇にこの能力は使わないこと。いいわね？」

悶助「はい。ところで、魔法はもう使えるのでしょうか？」

パチュリー「試しにほうき貸してあげるから、飛んでみなさい」

パチュリーさんからほうきを貸して貰った。

俺は早速ほうきに乗ったのだが…

悶助「うわっ、制御が出来ないぞ!?!」

ほうきの制御が出来ず、ほうきが暴れてしまった。

…ほうきって、暴れるものだっけ(´・`・´・`・´)

パチュリー「ほうきを握ってみなさい」

悶助「は、はい!」

俺は急いでほうきを握ると、ほうきが落ち着き始めた。

パチュリーさんによると、ほうきに魔力を入れないと暴れるらしい。

…なにそれこわい(´・`・´・`・´)

そう言うことは、予め言ってくれ…

悶助「あれ、でも魔力なんて無いんじゃない? ただの人間ですよ。俺」
パチュリー「魔法と空間を操れる人間がただの人間な訳無いでしょ」

あう。何も言う言葉が無い(´・`・´・`・´)
現に、今飛んでるからただの人間じゃないか。

パチュリー「一旦降りて来なさい。まだやりたいことがあるから」
悶助「分かりました」

俺は一旦旋回して、徐々に高度を下げた。
そして無事に着陸をして、パチュリーさんの所へ向かった。
…うう、お尻が痛い。(´・`・´・`・´)

パチュリー「今度は魔力を測るわよ。これは魔力を数値化出来る眼鏡」
悶助「ほうほう、分かりました」

パチュリーさんによると50000を越えると相当な魔力、らしい。

3分後。

パチュリーさんは計り終えたようだ。
すると、急に俺の肩を掴んで…

パチュリー「も…もん!？」
悶助「え、パチュリーさんどうしたんですか」
パチュリー「さっき計り終えたのだけど…あなた、人間じゃないわね?」

お前ら人間じゃねえ！つて。

パチュリーさんに言われたくありません（・・・）

悶助「いくつだったんですか？」

パチュリー「：108479。私の魔力は76550だから、私よりも魔力があるのよ」

ちよつと何言ってるか（ry

悶助「嘘を付かないで下さい」

パチュリー「あら、私嘘は嫌いよ？」

悶助「：（・・・）」

俺がパチュリーさんよりも魔力があるつて…

悶助は信じられなかった。人間が魔女に勝つのか？と…

ガタン！！

パチュリー「!?」

悶助「（、、）!?」

どこか開いたのか？周りを見渡すと…

レミリア「話は聞かせてもらったー!!」

ああ。やっぱり幼じ【規制】レミリアは可愛いなあ（、、）
カリスマなんてどうでもいいや。うん

そう和む顔でレミリアを見つめていると…

レミリア「何よ、もん。哀れみの目で見てくるなんていい度胸ね」
悶助「いえ、かわいいなあと思ひまして」

レミリア「…お世辞は効かないわよ？それよりもパチエ」

パチュリー「何？」

レミリア「もんにスペルカードを作らせましょう」

スペルカードかー

…溜符「かめはめ波」作ろう。そうしよう

紫「ド　ンボール禁止」

…ん？どこからか声がしたがスルーするか。

レミリア「んじゃ後はパチエが教えてね。私は忙しいから
パチエ「はい、はい。」

レミリアはそう言うと言って出て行った。

パチュリー「んじゃもん。スペルカードなんだけど…」

悶助「一つ思い付いてるものがあるのですが」

パチュリー「なら話が早いわ。後はこの紙に手を置いて、そのスペルカードの弾幕をイメージすれば出来上がり。」

悶助「分かりました」

悶助はド　ンボールのかめはめ波をイメージした。

すると、かめはめ波のような模様が紙に出来た。成功か？

パチュリー「成功ね。後は魔力を使って発動するだけよ」

発動のポーズは何でもいいらしい。

悶助「よし…行きます！」

溜符…

この時点でポーズをするらしい。

俺は片手を上げてカード宣言した。

かめはめ波！！

すると、マスタースパークのような光砲が出来た。

俺は叫びながらしばらく放っていたが、しばらく放ってたせいか光砲が消えた。時間制限とかあるのかな？

ふう、かめはめ波はやっぱりいいん…って！？

かめはめ波の影響で図書館の一部が壊れたのだ。

あちゃー、別のところでやれば良かった…と後悔しても遅い。

あの一、パチユリーさん？

パチユリーさんは怒りを抑えてふるふる震えていた。

パチユリーさんマジこわい(´・`・´)

パチュリー「見事に壊してくれたわね」

悶助「…ごめん、なさい」・・・」

…色々大変な紅魔館の生活。

悶助は、この生活に付いていけるのか心配になったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8802x/>

普通の現代人が幻想入り

2011年10月30日04時17分発行